



家隆假託書の検討：
「和歌知顯集」「和歌口傳抄」をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三輪, 正胤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006574

家隆假託書の検討

—「和歌知顯集」「和歌口傳抄」をめぐって—

三 輪 正 胤

はじめに

鎌倉時代後期における御子左家の分裂は、俗に云う二條・京極・冷泉の三家の分裂対抗に止まらなかつたと思われる。御子左家内においては、庶流に當る爲顯、爲實等がこれら三家に對立し、或いは迎合し、その勢力の伸長を企てたようであるし、又御子左家外においては、六條藤家の末流や、御子左家の定家に對應すると云われた家隆の末流等が、それぞれ一派をなそうとして暗躍したようである。本稿では、この家隆末流の動きはどんなものであつたかを、家隆假託書を検討することによって考察してみたい。

従來、家隆假託書、又は家隆の名を記しながら偽書と目されたものは、續群書類従本系「和歌知顯集」、「和歌口傳抄」、「和歌灌頂次第秘密抄」等がある。この中、本稿では前二書を採り上げ検討してみたい。そして、續稿において、全體のまとめをしてみたい。

一 「和歌知顯抄」をめぐって

家隆假託書の検討

室町時代、中期、一條兼良の「伊勢物語愚見抄」において、

伊勢物語の末書に知顯集といふは、大納言經信卿の筆作といひ傳へたり（中略）彼知顯集に、業平中將は馬頭觀音、小野小町は如意輪觀音の化身といへり、其外うろむなる事のみなり、是は後世に色このみの人の此道のかとうどにせんために、經信卿の名をかりて擬作せるにやとぞ覺侍る

と評された伊勢物語の註釋書「和歌知顯集」については、近來漸く研究が行なわれ始めた處と言つてよいかと思う。その研究の中で、特に大津有一博士は、「和歌知顯集」が中世において、かなり重要視されたいらしい事を明らかにされた（註一）。又、片桐洋一氏は、「伊勢物語」の「古註」全般に、その註釋態度の一に、事實性、實録性というものがあることを指摘された（註二）。

ところで、以上の御研究の成果の中でも「和歌知顯集」の成立事情となると、餘り見當がついていなかったようである。ところが、ここに、その成立事情の一端を述べられるかと思われる記事が出現した。それは、鎌倉時代後期成立と思われる、能基の「古今和歌集序聞書」であ

る(註三)。以下この記事の信憑性について、暫く考えてみたいと思ふ。

古今に三の流あり。一には定家、二には家隆、三には行家也。
問 家隆は俊成卿の弟子也。俊成は定家の父也。何ぞ家隆の流とて別に有へき哉。

答 俊成歿して後に定家・家隆左右の翹たり。雖然、家隆は家に定家の末をうけたるによつて一義を成事あたはず。こゝに師の源大納言經信卿、住吉に參籠して大明神に和歌の不審を祈請す。三七日に満する夜、住の江の月隈なかりける夜、老翁出現して經信に向て、何事を祈請し給ふそと問給ふ。答曰、吾は是、鳥羽帝より、歌に七の大事あり、是を尋ねさせ給ふ、是を諸家の人に非可尋、仍大明神に此事を祈請すと申。翁云、何ほどの大事を承はらんと云。經信卿の一々不審を申。翁聞きて云、安き程の事也。大明神の御託宣を待に不及とて、七夜か程不審を開き聞かす。是を經信卿注して十二帖の書に作て、六卷をば鳥風問答神頭風傳と云ひ、今六卷をば知顯集と云。今は翁は明神の化現也。家隆、定家に義を違へんか爲に、彼風傳を尋て、就是義、定家の義に義を替へ、文字を讀を替て、二の流とす。然とも、經信より血脈相承無きによりて、當流には、家隆を我家の末の物と號する故なり。
(東大圖書館本により、句讀點を私意により付す)

さて、この記事において注意されるのは、次の二點である。

- ①家隆は定家より位置が低く、一流を成すに至らなかつたこと
- ②住吉翁の傳授による六卷の書が作られたこと

この二點について以下少しく考えていくことにしよう。

まず①の點について、「古今和歌集序聞書」に近い頃成立の、眞觀の「秋風抄序」は、近くはすなわち定家、家隆等の卿は、昔の赤人人丸の互ひにかみしにも立むことかたくなむ有りけるがやうにぞと記して、二人をほぼ同等に扱っている。これに對し、爲家の子源承

は、流石に御子左家の一員を占めるものとしてか、定家家隆とて侍りけれど、いひくらすぶべきにあらず、定家まされり」という話を、その「和歌口傳」に記している。

以上、僅か二例ではあるが、同時代的に、定家家隆の評價の相違があることを知りえたのであるが、この爲顯流の如き、家隆を著しく低く評價する方法は際立つたものと考えられよう。これは、爲顯流が、家隆流を特に低く評價することに依つて家隆流の存在意味をなくし、次いで自己の流派の秘傳を與えることによつて、家隆流を爲顯流の一派として組み込むことを狙つたものと云えるのではなからうか。それが、當流には、家隆を我家の末の物と號する故なり」との言の中に現われていると思われる。この推定をかなり裏付けてくれるのが、同じく爲顯流の書「新選帝說集」である。「新選帝說集」は、その序文において、本書が住吉明神からの傳授であることを述べ、それが嫡々御子左家の祖俊成に傳わり形を成したことを述べている。次いでその奥書においては、序文を承けて成立の經過を述べ、次いで冷泉家、家隆のことに言及しているのである。その奥書は次のようなものである。

此一卷、保元二年丁丑、三月之比、依勅言慮考、古帝說集爲本、新敷書置侍、曾以非慮、任勅所、無僞者也。後見之人、努々無傳授、難有分別者、舉一偶似平三偶歟。不可有正體。以再勅、書置可給事所、假名之清濁、形體之六儀、九章之純然、八相通落着斟酌條種、冷泉家無之。家隆、定家、此道想望云々、冷泉家同等侍者、右之條々倅玉也。其時の哥に、和歌濃浦哉奥津鹽相浮出哀我身世流邊志良世與、有ケレハ、形ノ六儀・八相通許玉。家之歌其記有之。後代之子孫、可存此旨者也。右之六ヶ條、此書相傳之事、不可有諸家、秘々也。

(大東急記念文庫本により、句讀點を私意により付す)

爲顯

この記事には、俊成の立場に置いて書かれ乍ら、冷泉家の存在、六ヶ條の秘伝の存在等考えられないという、時代錯誤が容易に感じられ乍らも、それが却って爲顯流の位置を顯著に浮び出させるといふ面白さが含まれている。即ち、御子左家の三派分裂の中で、その三派に成り得なかつた爲顯流は、假名之清濁以下四ヶ條の秘伝においては、三派の一である冷泉家に勝ると主張しているのである。次いで家隆流にはその秘伝の中二ツを傳授するという方策を採っているのである。

特に「形ノ六儀」は、爲顯流の最極秘のものの一であると知られ、家隆流との結びつきは緊密なものがあつたと思われる。即ち、爲顯流の書「玉傳集和歌最頂」では、六義に性体形の三有(略)三種の義には、性の六義は秘事にあらずと記し、同じく「竹園抄」では、六義に付て三種差別あり、性體形なり、體形の二種大秘なる故に不記之と言ひ、「新選帝説集」でも、十八六儀ト云事有、性二六、體二六、形二六也、體形ノ二ノ六義ハ実子モ一人ノ外コレヲツタヘスと述べているのである(註四)。

さて、以上のような兩派の差を考慮した上で、先に問題とした②の點を考えてみよう。

②の問題を「古今和歌集序聞書」の記事を整理して細かく採りあげてみると次の諸點を考えねばならないであろう。

- a 經信卿作であること
- b 住吉翁が登場すること
- c 歌の七の大事を記したものであること
- d 六卷の書であること
- e 一は鳥風問答神頭風傳の名をもつこと
- f 一は知顯集の名をもつこと
- g 家隆が義を變え、文字の讀を變えて一書を成したること
- h 經信以来の血脈相承があること

家隆假託書の検討

こゝで先ず、現在最も研究の進んでいる「和歌知顯集」を採り上げfとの関連を考えてみよう。

大津有一博士は、前記註一の書「伊勢物語古註釋の研究」において「和歌知顯集」の諸本を整理され、大略次のような結論を出された。

その型態、内容からして三條西家本系、續群書類従本系、保阪本系の三系統が立てられること、書陵部藏一本奥書により、文永年間存在が知られ、正應五年に相傳秘本があつたこと、鎌倉時代後期の寫しが認められるものとして、保阪本(保阪本系)、書陵部藏傳爲氏筆本(三條西家本系)、書陵部藏斷簡(註五)があること。

以上の事実の中、保阪本系は、零本の爲aからhの事項に該當するものが見當らないので、本稿での考察の対象にはならない。ただし寫本として他の二點と共に、「和歌知顯集」の鎌倉時代後期存在を裏付けるものとして、價值が高いことは云うまでもない。

さて、大津有一博士の紹介された諸傳本は、三條西家本系として、三條西家藏本(未見)、書陵部藏正應五年奥書本、書陵部藏舊阿波國文庫本、書陵部藏傳爲氏筆本、天理圖書館藏本、彰考館文庫藏本、東山御文庫藏本(未見・註六)、續類従本系として、續群書類従所收本、内閣文庫藏本、光慶圖書館藏本(焼失)、九州大學付屬圖書館本(未見)、松平文庫藏本等であるが、さて、これらは何れも「知顯集」の名を持つところからまずfに該當するものと考えてよいであろう。

そこで次にdの項目に移ろう。まず續類従本系は上・中・下の三卷仕立であるから該當しないことになる。一方三條西家本系は表(一)に見る如く、いろいろ問題は残るが、大要は六卷本であると考えられそうである。しかし、この卷立から見ると、三條西家本系は、三條西家本系(天理圖書館本を含む)と舊阿波國文庫本系(傳爲氏筆本を含む)とに分類される。そして正應五年奥書本はこの舊阿波國文庫本系を基にして續類従本系を合體したものと云いえよう。

卷立において何故このような複雑な現象が出現したのであろうか。原本生成時における入り組んだ事情がこゝにあるのかもしれない。こ

れは註五で述べた續類従本系を基にしたものに三條西家本系が合體した形のもの等をも併せ考えてみなければならぬ問題であらう。

△表一▽

三條西家本系の卷立について

三條西家本	天理圖書館本	舊阿波國文庫本	傳爲氏筆本	正應五年奥書本
序詞言	同上	同上	同上	ナシ
伊勢物語大事 (第一卷)	同(第一卷上)	同(第一卷上)	同(第一卷上)	ナシ
名詮自性云々 (第二卷)	同(第二卷上)	同(第二卷上)	同(第二卷上)	同(第一卷上)
1段ヨリ (第三卷)	1段ヨリ (第三卷)	4段ヨリ (第三卷)	4段ヨリ (第三卷)	4段迄以下ナシ
9段ヨリ (第四卷)	9段ヨリ (第四卷)	23段ヨリ (第四卷)	23段ヨリ (第四卷)	23段ヨリ (中)
40段ヨリ (第五卷)	40段ヨリ (第五卷)	87段ヨリ (第五卷)		87段ヨリ (下)
43段迄以下ナシ	124段迄以下ナシ	伊勢物語牛女共事 (第六卷)	同(第五卷上)	同(第六卷上)

(各巻の始まる内容を記した。アラビヤ數字は伊勢物語の定家本該當段數を示す)

次には、a b について考えよう。まず經信卿作ということ、三條西家本系、續類従本系とも、その巻頭に、大納言經信作(又ハ撰)と記しており矛盾するところはない。又住吉翁の登場についても、兩系統とも全く同文で、九月十三夜の晩、住吉社頭において、百才餘の

翁が伊勢物語の奥儀を語るといふ趣向をとっており、是又矛盾はしないのである。

次に、cの問題に入らう。歌の七の大事という事については、兩系統とも全く言及しておらず、住吉翁も何も述べていない。強いてこれ

に該當するものを求めるならば、三條西家本系の序詞言であり、續類從本系の巻頭に相當する箇處の歌の論のものになる。そこには、大和歌の歴史、大和歌命名の謂、三十一字の謂、五句の謂、三身の事、六義の事、六昧の事、四病の事の八項目が述べられている。これは、私八項目と認めた譯であるが、假に七項目になるとしても、それが歌の七の大事と云いうるかと云うと、何とも斷定は出來ないのである。

この問題は次の e に關連して、やゝヒントがえられる事實が存在する。それは爲顯流の書「玉傳深秘」の中に、七歌鳥風問答記 源經信記と云う一項があるのである。これはその題名からしても、又經信記と云うことからしても「古今和歌集序聞書」の記事をかなり信頼度あるものにすると思われるが、さてその内容はというと、七首の歌の奥儀を解説したものである。即ち、住吉の御歌に云として三首、人丸の枕草紙の歌に云として一首、伊弉諾の御歌に云として一首、天智天皇大后宮の歌に云として一首、以上七首を解いている。このような七首の秘歌の存在を考えると、七の歌の大事を説いたものが存在したであろうことは容易に想像される。しかし、これが d の項目に云う六卷の書にはとうてい成りえないことも事實である。現に七歌鳥風問答記は墨付一丁半程度にすぎない。そこで、歌の七の大事と云うこと、六卷の書との關係を考えて、最も穩當なところは、歌の七の大事を説いたあとに、伊勢物語、又は古今和歌集を註釋して、それが六卷の仕立になつていたということである（註七）。

さて、六卷仕立が問題になると、e の項目に關連して、「鳥風問答神頭風傳」の書が存在が氣になる。しかし、現存の書としては、現在迄の處全く見出しえない。唯、鳥風と云うのは、三條西家本系の又、問答と云うのは續類從本系の問答形式であるからして伊勢物語の註釋書ではないかと想像される。そしてこの想像は、書陵部藏「伊勢物語見聞書上卷抄」（註八）の記事によって裏付けされる處があ

る。

今此家ノ本ハ中將自筆ノ品。中將子孫見國三位相承シタリシヲ、定家先祖俊忠中納言ニ傳故ニ此ノ家ノ本トナリ、朱雀院ノ御時、大貳長能右衛門佐道濟ニ勅テ注、髓腦目錄ヲ造テ塗籠ニ納故ニヌリゴメノ本ト云。其後ニ後鳥羽院ノ御時、此書ヲ定家卿預置。又源大納言經信卿ノ住吉ニ籠テ七日祈タリシニ、明神老人ニ現テ問答シ給エル神頭風傳即此家ニ傳タリ。サレバ自筆本塗籠ノ本也。

右の文章は、文脈からは神頭風傳と塗籠本とは同一物になるが、内容上からは別箇のものと考えらるべきであろう。とすると住吉參籠による作製物「神頭風傳」の記述は、「古今和歌集序聞書」に云うものと全く一致するのである。これは同時に、此家ニ傳タリとある此家は「伊勢物語見聞書上卷抄」の冒頭に註されている定家註と云う定家流になり更に限定すれば爲顯流を指すものと理解されよう。

さてこうしてみると「鳥風問答神頭風傳」に類するものが、爲顯流の諸書の周邊に二つ存在する。

その一つは、神宮文庫藏「古今秘歌集阿古根傳」である。この書は、爲顯流の書である「阿古根浦口傳」を記したものであるが、その後「社頭風傳集」という一項を付加しており、ほのぼのと、歌の深義を記している。

他の一つは、彰考館文庫藏「古今秘密灌頂」である。この書は爲顯流が活躍した時代に生れた、所謂和歌の灌頂書の一であるが、その中に歌の深義を説明するに當つて、社邊風傳集と引用をしているのである。

以上、三の資料にすぎず、極めて不明確な點はあるもの、その e の項目の信憑性がある程度高め得たものと考えたい。

さて次に h の問題を考えてみよう。經信以來の血脈相承云々という

ことについては、私の今迄の乏しい量の系圖、系統類の調査では、爲顯流が最も該當するにふさわしいものと云いうる。即ち、爲顯流の書「玉傳深秘」にある、血脈年號奥書には、住吉大明神 業平 天武天皇 聖武天皇 天照大神 醍醐天皇 貫之 時文 順 長家 經信 俊賴 俊成 定家 爲家 爲顯 神垂 性即とあって經信以來の血脈が確認される。これと類似したものは、「古今和歌集師資相承血脈譜」(静嘉堂文庫藏)の、代々相承印加秀詩にある。

又同じく爲顯流の書「和歌古今灌頂卷」の、古今相承血脈譜には、不住人丸―經信―俊賴―俊成―定家―爲家―爲顯―爲清とある。

以上二書の例はそれぞれ血脈が書かれた目的は違っていたと思われるのに、經信以後の血脈相承が全く同じなのである。この事實を支える意識は「古今和歌集序聞書」において經信以來の血脈を問題とする意識に相通するものがあるとみてよいのではなからうか。

さてこうした事をおさえながら、續類従本系のみにある、和歌ちけんしうさうでんの人々の事、をみると、興味をひかれる事實が出てくる。

和歌ちけんしうさうでんの人々の事 大なごんみなもとのつねのぶのあつそん もくのかみみなもとのつねよりのあつそん しゅんゑほつし じやくれんほつし じう二るふぢはらのかりうのあつそん ゑんしよにうはう りうせんほつし てうけんほつし

この系統にみえる家隆の後の、遠所女房というの、文永年間に宗尊親王に仕えていた「宮内卿家隆の孫」という女房にでも當るであろうか(註九)。又、隆専法師というの、「和歌文學大辭典」の勅撰作者部類に見える。從二位家隆子、或は三井寺僧隆尊と同一かと記された人物であり、「夫木和歌抄」「現存和歌六帖」「秋風抄」等に散見する、隆尊と同一であろうか。若し以上の推定が當っているとすれば、この相傳系統は正に家隆一流のものになるのではなからう

か。

こゝまでくると、經信以來の血脈は爲顯流に顯著なものであり、「古今和歌集序聞書」の記事の信憑性かなり高いことを考え合わせてみると、正に、續類従本系「和歌知顯集」は、家隆流によって作りかえられた書物と云つてもよいのではないだらうか。

それでは若しこゝで、三條西家本系が爲顯流のものであり、續類従本系が家隆流のものであるとするなら、先のBの項目に關連して家隆ほどの程度、義を変え、文字の讀を変えた、と云いうるかを考えてみよう。

三條西家本系としては「古今和歌集序聞書」に云う爲顯流のものに最も近いものとして舊阿波國文庫本を採りあげることにする。

まず、舊阿波國文庫本は、その内容が大きく三部に分れると考えられる。第一部は序詞言に當る部分、第二部は「伊勢物語」の本文の註釋部分、第三部は卷六に當る、伊勢物語牛女共事、物語入給人々之事である。

まず第一部には、大和歌の歴史以下八項目に汎る歌学的なこと、次に住吉參詣による傳授の謂、傳授は三人迄に限るとの誓文があるが、兩系統とも、殆ど一致する内容を記している。續いては、續類従本系の方に、傳授に關する誓文、知顯集相傳人々之事、立申起請文の三項がある。次に兩系統とも、住吉參詣にて翁と語る部分をもつが、その後半において「伊勢物語」の増補十六段の話のあと、舊阿波國文庫本は、物語の所詮を述べている。これに對し續類従本系は、増補十六段の話を更に深化させている。次に、兩系統とも「伊勢物語」の謂を述べているが、舊阿波國文庫本は、その命名に典據あることの一項目を附加している。以上が第一部の比較であるが、こゝでできた差、即ち續類従本系が、物語の所詮を省略した事により、續類従本系は必然的に、舊阿波國文庫本にある第三部をもたない結果になつてい

る。物語の所詮は、「伊勢物語」は男女和合の書であるとし、その観点から業平の關係した女性に言及するのであるが、第三部はその人々を具體的に述べているのである。

次に第二部はどうであろうか。これは大まかに言つて「伊勢物語」を史實に基いた統一體として理解する態度を基本として貫ぬいており、兩系統とも差はない。しかし、「伊勢物語」の本文の引用量を変えたり、相互に違つた語句をとりあげて註釋を加えたり、一段全體を相互にとりあげていなかったりして表面的には、かなりの差が目につくのである。

さて、以上三部の構成の差からしてみると、やはり、舊阿波國文庫本を基にして續類從本系が出たということは言つてもよいのではないかと思われる。

以上、「和歌知顯集」をめぐることは、爲顯流と家隆流が存在し、家隆流が爲顯流のものを基に一書を作りあげた事を、現存の諸書を整理しながら述べた。猶、多くの問題は残しているが、一應この考察を終ることにしたい。

二 「和歌口傳抄」をめぐる

元祿十五年刊の古語深秘抄に收められた外には、寫本として傳つてゐるのみかと思ふ。

奥に、

此抄者家隆御説傳奉所也。雖爲片時他人之手不可渡。是先師作也。

建久三年七月日 大中臣忠光 判

とある。家隆を先師と稱してゐるが、家隆は嘉禎三年四月に薨じたのであり、建久三年は四十五年前であり、家隆三十五歳の時である。尊卑分脈にも、正續群書類從の中臣氏系圖にも忠光の名は見えない。建久三年が元號の誤かも知れないが、明にし難い。内容から見ても、鎌倉時代末期以後のもの

であらうと思はれ、やはり假託の偽書であらう。

「和歌口傳抄」については、右の「日本歌學大系 第三卷」の解説における久曾神昇氏以上に出る説明は今の處出來ない。現在迄に調査し終えた八本（彰考館藏本、書陵部藏本他）程度についても何等の新しい事實は付加できない。

しかるにこゝに、三手文庫藏本「和歌灌頂傳」、神宮文庫藏本「和歌名目灌頂」（以上二本内容は同じ）との關係を調べてみると、興味ある事實が指摘される。兩者の關係を表として示そう（表二参照）。

この表から云いうる事は、兩者は全くその序文を異にしていないが、その本文内容は殆ど一致することである。しかも、その本文内容の一致程度は「和歌口傳抄」が「和歌灌頂傳」（以下の記述においては、この書を以つて代表させる）の證歌としてあげたもの二首の中一首を省略し、説明文辭をやゝ替へている（表中に略同上と記した六ヶ所）に過ぎないという状態なのである。

ところで三手文庫藏「和歌灌頂傳」にのみ記されているものであるが、その奥書に「中納言爲家卿一侍從爲顯卿一明覺房阿覺一實道」とあるのは何を物語るものであろうか。「阿覺」とある右側の注記は、爲顯の法名が「明覺」であるから、恐らく注記の誤りであらう。とすると、「阿覺」「實道」というのは二人の人物になり、今迄の處どのような人物であるかを明らかにしていない。このような不明な點はあるものゝ、この系圖は、「和歌灌頂傳」は、少くとも、爲顯流の傳書である事を物語っているのではなからうか。

さて、以上二點、表(二)から考察した結果、及び相傳系圖より推量する處の事實を並べてみると、前章「和歌知顯集」をめぐる考察して来た一つの結論、爲顯流は家隆流に多大の影響を與へたという事に符合するのではなからうか。即ち「和歌口傳抄」は「和歌灌頂傳」を基にして、家隆流の何人かゞ作り替へたものではなからうか。

<p>○三曲 疎句 詞の縁にひかれて題を出す 。親句 必ずしも縁の物を求めねど親しく叶う 。正句 すぐく〜とさわる所なく題をあらわす (私注 何れも證歌を略す)</p>	<p>○三曲 略同上</p>
<p>○秀句の歌 〓秋の野に花みるほととの 〓みちよへてなりけるものを</p>	<p>○秀句の歌 ナシ(歌) 同上</p>
<p>○譬喩の歌 〓うす墨にかく玉章と</p>	<p>○譬喩の歌 同上</p>
<p>○對揚歌 。上の句に下句を對す 。一をすて一を賞す 。二ツ對しならへる 。春秋はなを木葉かくれも 連歌は此對揚の歌よりいづる</p>	<p>○對揚歌 略同上 同上</p>
<p>○そへ歌 疎句親句の如し〓ぬしやたれとへと答へぬ</p> <p>○詩の五品を歌に對す事 一、高砂 たかくいさきよき様 二、青逸 あいらしくいたいけしたる様 三、峻潔 うちきくは心得にくふかし 四、沖淡 すこしあはれなる様 五、藻麗 さわやかにすく〓昨日迄よそに思ひし</p>	<p>○ナシ</p> <p>○詩の五品 略同上</p>
<p>○詩の四品 一、芙蓉出水 高砂と青逸を具す 二、寒松病枝 沖淡と峻潔を具す 三、転石千仞 藻麗體 四、賢卑同笑 青逸をおかしくとりなす</p>	<p>○詩の四品 同上 略同上 同上 已上</p>

註

一 「伊勢物語古註釋の研究」(昭和二十九年三月 宇都宮書店刊)第一章

二 「伊勢物語古註考」(國語國文 第三十三卷 第四號)

三 拙稿 「鎌倉時代後期成立の古今和歌集序註について(上)」(文庫

第十三號)

四 以上に引用したもの、及び以下に引用する爲顯流の諸書の概要については、「名古屋大學國語國文學」第十二號、第十三號、第十四號、第十五號の拙稿を御参照願いたい。

五 この断簡は、大津有一博士の述べられているように（金澤大學國語國文第三號）、本文は續類從本系であるが、型態は鳥風形式であり三條西家本系に屬することになる。

六 未見ではあるが、大津有一博士は、書陵部藏正應五年奥書本と全く同一と報告されている（金澤大學國語國文 第三號）。

七 「古今和歌集」の傳授書として六卷仕立のものとしてすぐ想い浮かべられるのは、正和三年の問書を傳える定爲の所謂「六卷抄」である。この書は、そのしがきにおいて、爲顯がしばしば古今集を講じた事を傳えている。「六卷抄」の六卷仕立は單なる偶然の結果ではないと思われるが如何なるものであろうか。

八 前記大津有一博士著の一〇四頁にその大要が記されている。

九 稻賀敬二「源氏秘義抄」附載の假名陣狀（國語と國文學 第四十一卷 第五號）

寺本直彦「源氏繪陣狀考」（下）（國語と國文學 第四十一卷 第十一號）

翻刻

「和歌灌頂傳」（三手文庫藏）

凡例・解題

○三手文庫藏「和歌灌頂傳」を、出来る限り原本に忠実に翻刻した。これに同内容をもつ神宮文庫藏「和歌名目灌頂」を對校し、その主要な相違を（ ）中に記した。

○原本の行替りは適宜改變し、讀點を付した。

○丁替り毎に印を付し、その表に當る部分には、^五の如く記した。

○丁數は「和歌灌頂傳」の始まる處を以て第一丁と教えた。

○翻刻した二頁上段二行めは、編序題曲留が中心事項になっているが、これ

を説明項目の簡處へ移した。神宮文庫はこの掲出した形である。

○三手文庫藏「和歌灌頂傳」は「和歌手習傳」「和歌九品」と合綴されている。褐色表紙の稍左よりに、直接「和歌手習 和歌九品 和歌灌頂傳」と三行に記されている。江戸時代寫。縦二十一・三厘、横十五厘の列帖装、全部で二十六丁、最後の二丁は遊紙となっている。料紙は楮紙で、大判料紙を二つ折とし、更に、この折目を下端として二つ折にして仕立てである。従って丁數の表に當る部分は上端と左端が切れている。

第一丁表から「和歌九品」が、第十四丁表から「和歌灌頂傳」が始まっている。

○神宮文庫藏「和歌名目灌頂」は、縦二十七・二厘、横十六・五厘の楮紙袋綴本。江戸時代寫。濃褐色の表紙で、題簽はなく、左肩に「和歌名目灌頂」と、その下に朱で「全」と打付書になっている。全丁墨付で十四丁である。

第一丁表に内題として和歌名目灌頂とあり、すぐ本文が始まっている。

和歌灌頂傳（和歌名目灌頂）

名目ナント云々
五句五體ト云々

（ナシ）

夫歌之起ハ八必曲（曲）あり、物と心と和し、事と情と叶へり、凡春の鶯の林に轉り、夜の鶴の澤に鳴聲より始て、峯のましら、草村の虫、瀧の響、松のあらしにいたるまで、歌にあらすといふことなし、是のみならず、桃李浅深し色竹の煙、松霧の顯（影）、をのつから詔の縁の（二字ナシ）縁たり、然は心にきさす^一オ情、歌の詞にあらすは、思ひを文字に詫く（シテ）難知、されは八雲の詠、難波のこのの葉よりこのかた、みそもしあまり一文字に定て思ひを二五三七の句にのへ、貴き賤き此道に入れり、奈良御門は萬葉集を撰し（ミ）、延

喜(村上)御門は後撰集をも(ナシ)撰し(へり)、花山法皇は拾遺集を撰
ひ給へり(十四字ナシ)、其より後、ことの葉家々にしけく、撰集代
々にたえず、其中に歌義也(三字ナシ)仙の好に(ナシ)よむ所
ひとすちにあらず、歌の風情すくなきもあら(り)されは、秀逸句、
人に一句二句には不過といへり、是等のしな古今の序にみえたり、
凡拾なを(先達)たらざる處おほし、況末代のことのは、さこそと思
ひやられて、少々歌の名目を注しをけるにや、

此灌頂の作法は清原何ヨ(御託宣不注丸ト云々)家より傳はれりと
不知云々爰(十字及ビ注ナシ)是則此道に心さしふかゝらむ人に
信をとゝむ道の作法なれはくるしからしと思事傳へたり(ラセンタメ
ト云々)、但歌の名目を家々に傳へ、人の訓る」二事是あり、さ

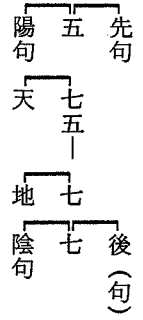
れは是等の事を教つたふる時の灌頂作法なり、傳へとは作法の卷所の
擧歌の名目をのへて(三字ナシ)傳るをいふ也、此灌頂は眞言宗等に
いふかことし(世間共ニ眞名有)、世間(出世ノ灌頂ハ)國王太子を
まうけ給へる時は(二)、四海の水を取て太子の頂にそゝき、國を
繼ぎ給ふへき位をさたむ、是を立太子の灌頂と名づく、是等の義に
入て歌仙を定むる時、此作法あり、歌仙とは此道に長せるを云也、
數しらすしけしといへとも、先(謬仙カスシラスト云へキ共先)和
歌の五佛を安置せよ、即人丸、赤人、猿丸太夫、小町、業平、是等
を(五佛ト)いへる事は、みな權化の人の歌道をきはめしむる故也、又
和歌の證據を奉れ懸、即住吉第三也、(第子云々)聖徳太子也、自餘之
歌神は心に可隨也、

先和歌(二)三事と云は(事アリ)(詞ノ面、句本意、心所詮ナリ)
一、詞面と云、歌之詞に心得にくき事也、又物の名にをひて可知事
多之、凡大和ことはの文字にこたへざる事これあり、詞にくらき物か

(ハ)心を知事かたし、能々歌詞つかひをしるべきなり
一、句の本意といふは歌の神也、心さす所の題をよみてあらはす
也三
オ

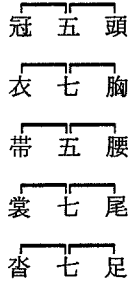
二、三心の所詮、是に二義あり、一には歌の同縁也、花鳥風月に寄
て、其たくひをよむやうあるとも、是を(二)よて下に心をつかふなり、
二には佛法にをのつから叶心也(アリ)、人の歌を以狂歌(言)綺語
のいたつらことと思へる、是則歌の(二字ナシ)所詮を不知故也、実
際理地ニハ思慮を忘れ、歌(言)句を離るといへとも、出假利生の方
便は、世俗の假名をまうけて、愚なる物を引導ため也、されハ尺尊は
西天にいて給ひて、諸國隨て、其詞をもて佛法の實義をあらはし給
へり、漢土にて(ハ)三聖を遺す、即孔子、老子、顔回の三人也、文
の詞をもて人の心を和け、佛法流通の方便とす、我朝又如此三十一字
をもて人の心を和け、情を知り、因果を信する媒とせり、誠に三聖の
本意をもしろす和歌の實義をも不辨して、いたつらに其詞をのみあさ
けらん物は、狂歌(言)ともいひつへし、綺語とも可嫌、たとひこと
は(ハ)風月にたつさはり、題は花鳥によすとも、所詮もし思へる所
あらは」四何そ佛法にそむかんや、爰以眞言難言語(皆是)第一義
と宣たり、色を見、聲を聞、みな心をき、(アキラ)むるはしめなれ
は、春花秋月を題とせん、何曾佛道にをひてさはりたらん、五言七言
(二字ナシ)の偈を頌す、既に深義を宣ふ、二五三七の句あに實語に
つうせさらんや、されは上古の賢人皆三十一字の中に法門を(ノ)深
義をのへたまへり、此故に、歌をよむにはむねと法を行すへき也、但
詞の面の句のすちよく成ぬる歌は、をのつから」法門にかなへりとい
へり、

先五句の名有



此五句をわくるに、五七五を陽とし、七々を陰にあつ、されは陰陽の二をはなれたる物はなし、天を五七(五)とす、此故に下にむかふ心あり、七々を地とする故に上にむかふ心あり、惣して一切の物に此心ありと知へし、

次に五句に一々の其名あり、



凡歌五句(ハ)人躰をよび、萬の体五ある物をあらはせり、故(如_レ此)頭胸等にあつるなり、諸の名目をもて歌にも少々用之(其)故は、漢家の詩賦を吾朝の歌に和くる故(也)

又云、冠と者、其頂にけたかかへし、しかも(然トモ)下(二)向ひて纓を垂よ

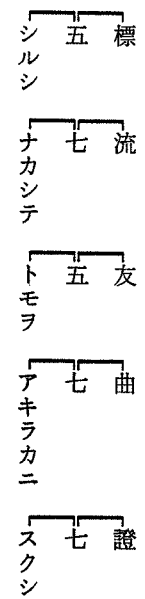
衣は胸をつくるへ、然も袖のかゝりたはやかなれ

帯はつめよ、腰をきらさくれ

裳はゆらめけ、即をさむる所あれ

沓ははなをうへにむけよ、足を納てぬけされ

次和歌の体(三)用体あり、体は即題也、用は即縁也、詞也、此体をもちるは、何れをさきにかむとも、人の心なるへし」されは、躰をさきにせる歌も有、用をさきにする歌もあり、是につきて歌をよむへきに名をつくりかへたり



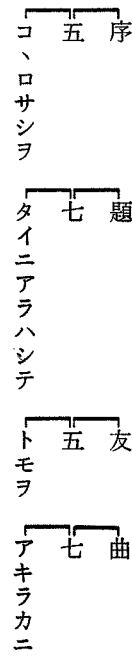
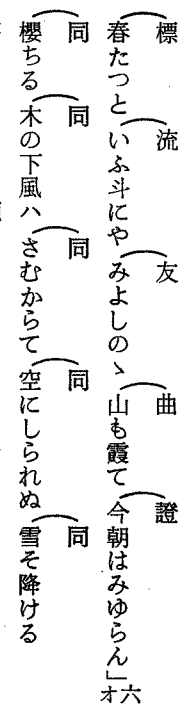
標とは、題をあらはしあくる也

流はまるほなくいひなかせ(タマル所也)

友は思はせて後、句に移らんれうにふつといひきらてさへよ

曲は題を(三)曲をつけよ

證はことほりをつけよ、上下句にかなふやうによむへし、たとへは

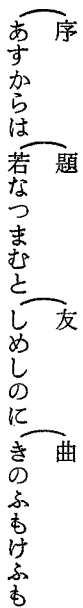


序は題をいはんとて序なり

題は友(也)

曲はあきらかにといふ也

證は如前、たとへは



證
雪はふりつゝ

同
こやの池に おふる菖蒲の なかきねは ひく白糸の

同
心ちこそすれ

是は二句に題をあらはすやうなり

惜 五 序
オシメ コ、ロサシヲ
同 七 題
タイニ
同 七 曲
アキラカニ
同 七 證
スクールヘシ

情はこと葉をおしめ

序は題也

曲證は如前、たとへは「

惜 序
思ひいつる ときはの山の 岩つゝし いはね (ハ) 社あれ
同 七 題
同 七 曲
同 七 證
戀しきものを

同
年ことに あふとはすれと 七夕の めるよのかすそ

同
すくなかりける

是は三句題をあらはす時のやう也、登蓮之申傳に(六字ナシ、又)

云、遍序題曲流と訓へたり、遍とはあまねく五句に通するやうなるへ

し、流はをはりの句をいひなかせ、題曲は如前、

家隆假託書の検討

惜 五 流 七 友 七 題 七 證

皆前にいふかことし

惜 七 流 七 友 七 題 七 證
ときはなる 松の名たてに あやなくも かゝれる藤の

證
咲て散哉

同 同
夏山の みねの 梢の たかければ 空にそせみの 聲は聞ゆる
同 同 同 同 同

是は四の句に(ノ)題をあくる也」
又云(二字ナシ)

惜 五 流 七 曲 七 證
(ヲシミ) (ナカシテ) (アキラカニ) (スクールヘシ)

同 七 題
(タイヲ)

皆是如前(四字ナシ)

惜 流 曲 證 題
白雲に はねうちかはし 飛雁の かすさへみゆる 秋のよの月

同 同 同 同 同
心あてに おらはやおらん 初霜の 置まとはせる 白菊の花

是は五の句に題をあらはす也、凡大概を申也、大方はかやうに心得て可讀也

疎句と者、題にはをろかなるものを、言の縁にひかれてひき出に（シ）て、題をあらはすなり、たとへは近代の歌に

櫻さく（ちる）遠山鳥のしたり尾のなか（し）日もあかぬ色哉
此歌の心は、櫻いつまでもあかすといはむとて山鳥の尾をひき入（ナシ）たる也、櫻には山鳥うとしといふとも、たくみに櫻開遠山とつゝけしたり、尾のなか（し）日もあかぬとよめる體也、又戀の心をよめる歌に

きえねたゝ忍ふの山の峯の雲かゝる心の跡のなきまで
此歌も、嶺の雲は戀にうとしといへとも、忍の山の峯の雲かゝるとつゝけむ爲也

親句はかならずしもその縁の物をもとめねとも、より來る所本（ニ）したしくかなふ様にそへよめる也、たとへは

とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人のおりにこそよれ（すれ）
此體にさし事のやうに、しかもうとき人もおりにこそよれ、我やとにもとめこよかしとよめる體なり

正句とはすくゝとさはる所」オなくこと葉に別の曲なく題をあらはす

きりくすよさむに秋のなるまゝによはるかこゑの遠さかりゆく
是體なるへし

又歌に、秀句の歌、譬喩の歌、對揚の歌、そへ歌とてあり、
又云、秀句の歌の體

秋のゝに花みるほと心の心をは行とやいはむとまるとやいはん
みちよへてなりけるものをなとてかはもゝとしも又なつけそめけ
ん

又譬喩の歌とは

うすゝみに書玉章とみゆる哉かすめる空にかへるかり金

又是體にも有、對揚の歌は、戀（ニ）ハ兩句對揚とも、是二品あり
一には、上句に花月などをきて、下句に、にほひ、光とをくなり、
たとへは

春はもえ秋はこかるゝかまと山霜も霞（霜ト霞逆）も煙とそたつ
又ハ、上にも下にも物の體をあけて、一をはすて一をは賞する様なり、たとへは

秋ハ猶木のはかくれもくらかりき月は冬こそ□□（みる）へか
□（り）けれ（る）
又、二を對しならふる尺あり、歌に云

はる雨のあやをりかけて（し）水の面に秋紅葉の錦をそしく
是は、春（ニ）秋を對し、あやをりかけしにしきをそ（ナシ）しく
と對する也

連歌は此對揚の歌より出たり
そへ歌に（ハ）疎句親句のことし、たとへは

ぬしやたれとへとこたへす藤袴きる人なしにはころひにけり
是體にそへよむへし

又、以詩の四の品を歌に對することあり」オ
一、高砂 たかくいさきよき體也

かさゝきのわたすやいつこ夕霜の雲るにしろき峯のかけはし
たとへは是體なるへし、かたはらいたき事なれとも、身にとりて透
逸の歌と定家撰へるかゆへに出し侍るなり（ヘシ）

二、宵逸 あひらしくいたひけしたる體也
明は又秋のなかはも過ぬへしかたふく月のおしきのみかは

此歌定家一期の秀歌と申傳へりける也
三、峻潔 てかけくるしく、うちをくに心えにくうふかくいさきよ
きなり、慈園は此體をこのみよめるなり

さやかなる月よりおつる袖の雨の雲は秋のよ□□（のき）は山のは

家隆假託書の検討

是體の風情なり

四、冲淡 うちん すこくあはれなる體也、少將内侍歌に

をさふへき袖は昔に朽はてぬ我くるかみよ涙もらすな

是體の姿なり

五、藻麗 さはやかに別の曲なくすくくくとよめる體なり

きのふまでよそに思ひしあやめ草けふわかやとのつまとなる哉
是體に思ひ事をすくくくとよむ品也

(又四ノ品ナ有り)

一には芙蓉出水 高砂與膏逸とを二具せり

二、寒松病枝 冲淡と峻潔との二を備へたり

三、轉石千仞 藻麗の體也

四、賢卑同笑 ケレヒオ 十二

是は秀(前)の五ヶの外也、かしこきいやしきうちきくに、あさ
くくと心得やすく、何となくをかきさまなり、膏逸の体をおかしき
さまにとりなせるなり

和歌之灌頂雖爲 オホキマ □最深秘中々々也、粗含

綸命之趣、且者加先達聖記早、仍他

人推不可知之、穴賢々々秘々而已(也)

奥(本)云

仁治二年三春首 藤原朝臣 在判

中納言 侍從 明覺房

爲家卿一爲顯卿一阿覺一實道(コノ行以下ナシ)

本云

康永六年 癸未 五月二日書寫早、大事秘々也